

自分らしさを生かし、学級や学校に参画しようとする子どもの育成

小学校 森田 宏美

研究協力者 白松 賢 梅田 崇広 (愛媛大学)

1 主題設定の理由

子どもは学びの主演であり、有能な学び手である。子どもは、「やってみたい」「この課題を解決したい」「友達の意見を聞いてよかった」「もっとよい自分になりたい」と、夢中になって話し合ったり、よりよい自分になるためには、どうすればよいか考えたりする。このような子どもの理解を基盤として、前年度の研究では、くすのき学習【学級・学校】の授業を創るとき、私たちは、目の前の子どもの姿を見詰め、子どもの思いや願い、心の動きや高まりを丁寧に見取り、聞き取りながら、子どもの学びをどう指導し、評価するべきかを考え、実践してきた。子どもたちは、自らの手で学級がよりよくなっていくことで、満足感が得られ、〈自己効力感〉が高まり、更に学級や学校に主体的に参画しようとする姿が見られた。

学習指導要領の改訂に伴い、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が進められている。くすのき学習【学級・学校】における「深い学び」を実現している子どもの姿とはどのようなものか、子どもの主体性と教師の指導性をよりよく発揮する子どもの学びの過程をどう創るのかということについて研究を進めていきたいと考える。

学級や学校は、子どもたちにとって、最も身近な社会であり、人と人がかかわり合う場である。そのような社会の場で、「自分らしさ」を発揮し、「なす事によって学ぶ」を重視した教育活動を展開していく。自分の長所だけでなく、短所も含めて今の自分をしっかり自覚し、認めることが「自分らしさ」である。子どもは、友達とのかかわりを通して、「自分らしさ」を作り上げていくものである。その「自分らしさ」が友達に認められた時、それを学級のために生かしていこうとするのではないか。そのような経験を通して、様々な課題に積極的に向き合い、友達と協働して課題を解決し、新たな課題に向け挑戦することのできる資質・能力を育成する。

今の自分自身や自分たちを見詰め、何が必要か考え、実践し、振り返る。このような過程を経て、「もっとよくなりたい」「自分たちならできる」という「快のイメージ」を持って、能動的に取り組むことが、本研究が目指す、「学級や学校に参画する」姿だと捉える。自主的、実践的な活動を通して、身に付けたことを生かし、よりよい学級や学級文化を創造しようとする子ども、つまり、参画する子どもを育てたいと考え、本主題を設定した。

2 くすのき学習【学級・学校】における「子どもと創る『深い学び』」

(1) 子どもと共に学びをつなぐくすのき学習【学級・学校】の授業づくり

ア くすのき学習【学級・学校】における「深い学び」とは

くすのき学習【学級・学校】における「深い学び」とは、次のような子どもの姿として表れると考える。

- 社会の形成者として、集団の課題解決に自発的、自治的にかかわろうとしている。
- 「他者」とかかわり合って、成長しようとしている。
- 新たな課題に向け、挑戦しようとしている。

学習の始まりは、子どもが「みんなで考えたい」「みんなで話し合いたい」という思いでありたい。話し合い、自分たちで考えたことが、更に学級や学校をよりよくさせていることにつながっているのだということを感じさせたい。そのためには、もの・こと、人とのかかわりが重要になる。それらのかかわりを通して、学級や学校での生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合ったり、役割を分担して協力して実践したりする。自分の成長は、

「他者」とのかかわりが不可欠である。友達とかかわり合うことで、時には対立やジレンマが起こることもある。その中で、折り合いを付けながら解決する力を身に付けていく。その身に付けた対立やジレンマに折り合いを付ける力を生かし、子どもは、学級や学校でのよりよい人間関係を形成していく。そして、自分らしさを生かしながら、学級や学校での生活づくりに主体的にかかわろうとするのではないか。このような学びを経て、自分は学級文化や学校文化を創る形成者であることを自覚し、自分の課題や自分の役割について真剣に考え、実践し、改善しながらよりよい学校や学級に参画しようとする子どもの育成を目指す。

イ 子どもと共に学びをつなぐすのき学習【学級・学校】

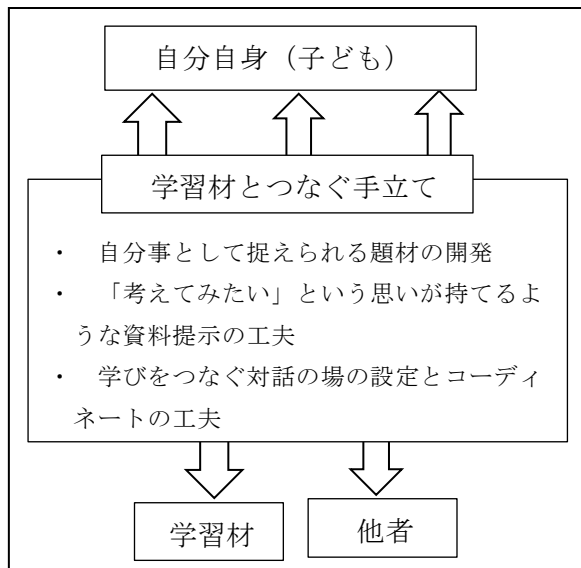


図1 子どもと共につなぐ学習

子どもは、題材について自分事として出会い、その解決に向けて主体的に話し合ったり、考えたりしながら各教科等で身に付けた力を総合的に働かせ、学級生活における自他のかかわりの中で、具体的な意思決定をしていく。自己中心的な見方・考え方や自分本位な意思決定ではなく、学級の成員であることを意識し、学級生活を通してやらなくてはいけないことを面倒くさくてもする気持ちを高めたり、自己実現を図ったりすることができるような工夫が必要である。そのために、教師は、よりよく生きようとする思いを持つことができるよう、子どもの思いや考えの流れを予想し、汲み取りながら子どもと学習材、他者、そして、子ども自身とをつないでいけるような手立てを講じていく(図1)。

(2) 子どもの学びをつなぐ指導の手立て

ア 学習材とつなぐ手立て

- ・ 子どもが自発的、自治的にかかわろうとする態度を引き出す題材の開発・構想
- ・ 子どもの「解決したい」という気持ちを引き出す出会いの場の工夫

くすのき学習【学級・学校】において、題材の持つ力は大きい。子どもが自分事として捉えた題材は、自然と学びをつなげ学習意欲を喚起し、持続させる。子どもが自分事として捉えられるように、題材にかかわる様々な資料やアンケート等を活用していく。その中で、学級や学校での生活上の課題を明らかにする。そして、その解決に向けて話し合ったり、考えたりしながら合意形成を図り、決定していくことができるような題材の開発・構想を行う。

また、子どもが主体的に「学習材」とのかかわりを深めることができるような「出会い」の場を工夫する。学習材とかかわる中で、「もっとよくなりたい」「よくなるためにこういうこともできるようにがんばりたい」といった子どもの活動意欲を高められるようにしていく。学級での話し合いを通して、友達の意見を参考にすることにより、「もっとよい方法があるのではないか」「友達の考えを参考にしたいな」といった自分の考えを再検討し、学習材と深くかかわっていかうとする気持ちを持たせられるようにすることを大切にしたい。更に、よりよい学級・学校生活に参画し、様々な問題を主体的に解決しようとする見方・考え方を働かせながら、「学習材」とつなげる。そして、集団でのかかわりを通して、子ども自身の理解を深め、自分のよさや可能性を生かす力を養うとともに、自分ができることを考え実践しようとする見方・考え方を生かし、発揮する場面を設定する。

イ 他者とつなぐ手立て

- ・ 対話のコーディネート工夫
- ・ タブレット端末の活用

「追究の場面」では、子どもが見方・考え方を働かせながら「学習材」とかかわり、「他者」との対話をどのように深めていくかを考えておく。対話を深めるために、グルーピングを工夫したり、ファシリテーション・ツールを用いたりすることで、自分の考えと友達の考えとの共通点や相違点を比較する。タブレット端末なども活用して、子ども同士で考えを比べたり、それぞれなぜそう考えたのかを聞き合ったりして、自分の考えを深め、合意形成を図っていく。教師は問い返ししながら行為の背景にある思いについて聞き出すなど、対話をコーディネートすることを通して、様々な価値にふれ合い、個の考えを深め、「学習材」とのつながりを発展させていく。

ウ 自分自身とつなぐ手立て

- ・ 活動の達成状況を把握するチェックリスト等による振り返り
- ・ 自分や集団の変容やメタ認知を促す機会の工夫
- ・ 現在や将来に希望や目標を持って生きる意欲や態度を形成させる設定の工夫
- ・ 写真や日記等の資料の活用の工夫

子どもは、「学習材」と「他者」とつながることで、自分の学習を振り返ったり、自分の変容について考えたりする。

「振り返り」の場面では、達成感を味わわせる場を設定し、自分や集団の成長を自覚することができるようにする。その活動を通して、何ができるようになったか（学習内容）だけでなく、どのように活動してきたか（学習方法）をしっかりと認識させ、学びを自覚することができるようにする。そうすることにより、結果ではなく、その学びの過程と自分たちの思いを大切にすることができ、その思いを明日からの自分や自分たちの未来に生かすことができるようになるのではないかと考える（図2）。そのために、活動の様子を撮影した写真やチェックリストを活用し、実践したことを振り返り、言語化することで、自分や集団の変容を感じることができるようにする。その際、自分への気づきを促す適切な情報・資料を提供し、友達とかかわり合いが、自分の成長につながっている事を実感させる。こうして、「学習材」、「他者」、「自分自身」をつなぐことで、「深い学び」の実現を目指す。

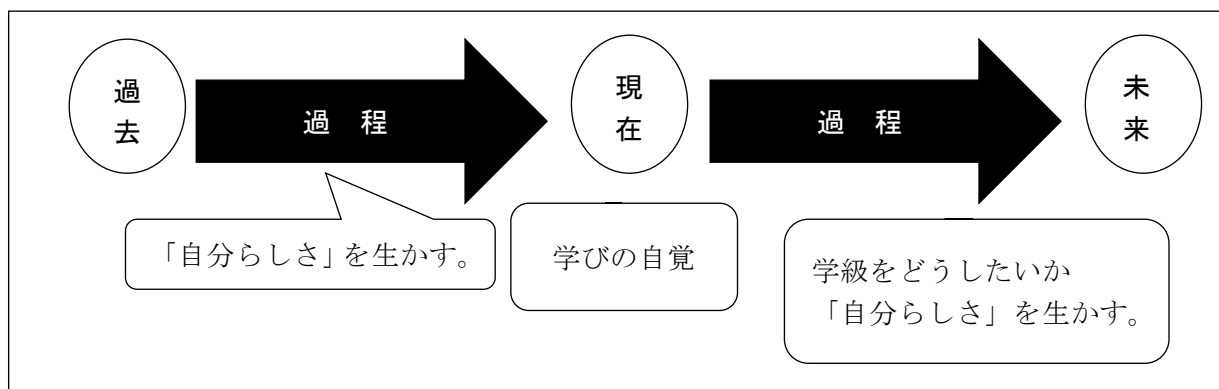


図2 自分自身とつなぐ

(3) 「子どもと創る『深い学び』」における評価

ア 評価の視点

くすのき学習【学級学校】において、目指す子どもの姿は、先述したように「深い学び」が実現したとき表れる子どもの姿である。子どもが「深い学び」を実現している、つまり、「生か

し、発揮しよう」としている過程で、三つの資質・能力を空間軸と時間軸でつなげて見取っていく（図3）。子どもたちが自己の活動を振り返り、活動の結果だけではなく、活動の過程における子どもたちの努力や意欲などを積極的に認めたり、価値付けたりし、子どもたちを多面的・統合的に評価していく。

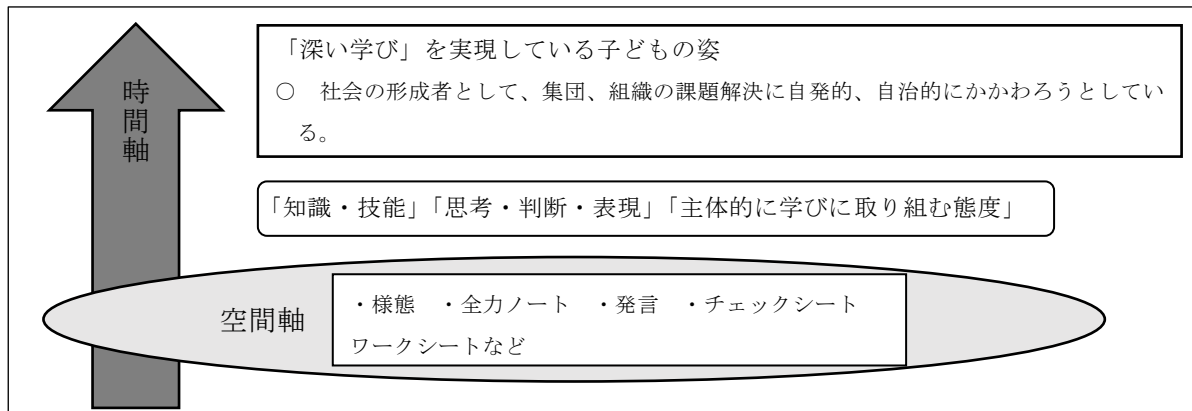


図3 評価の視点

イ 評価の具体的な手立て

(ア) 空間軸から見た手立て

授業や生活の中での子どもの様態観察と、チェックリストにおける内容や自己評価・他者評価の記述を手立てとし、子どもの理解を深め、指導の改善につなげる。

様態観察については、子どもが実践している中での表情や行動、日記や生活している中でのつぶやきから自分を見詰め、自己の生き方をよりよくしていこうとしているかを見取る。見取ったことを賞賛したり他の子どもに伝えたりしながら、「さらによりよくなりたい」「自分も頑張りたい」という気持ちが持てるように、個から全体へ学びをつなげたり深めたりしていく。

(イ) 時間軸から見た手立て

子どもたちは、PDCA を繰り返しながら、学級の文化を創り上げていく。そこで、定期的に、これまで書いきた日記を読み返したり、掲示してある学級でまとまった考えを見たりして、これまでの自分や他者の思いや考えを振り返る機会を設ける。その中で、集団の中の客観的な自分を認識していくと考える。他者評価を取り入れながら、集団の中での自分ができること（「自分らしさ」）を自覚し、集団に参画しようとする思いを持てるようにしていく。

(ウ) 子どもが自己評価する手立て

活動をしたことによる自分や学級の成長をじっくり見詰め、その思いを全力ノート（自主学習ノート）に書き溜めていく。そして、それらの思いを拾い、子どもたちの日記を中心にした通信を作成し、子どもたちの心の成長を共有する記録として、また、互いの掲示板として活用し、いつでも振り返りができるようにする。このように、過去を振り返ることで、よりよく生きるためにこれからの自分や自分たちに何が必要なのか考えていくことができるようになるのではないかと考える。

自己評価は子どもと「自分自身」をつなぐ効果的な手立ての一つである。活動の目当ての達成度を数値として評価することと、自由記述による活動の振り返りを合わせて行う。チェックシートやワークシートによって、現在や将来にわたって自分らしく生きるために、自分に合った目標を立てることができているか、自己のよさを生かそうとしているか「他者」と協働して目標の達成を目指しながら主体的に行動しようとしているかを確認できるようにし、子ども自身が自己の成長や変容を把握し、主体的な学びの実現や今後の生活の改善に生かしたりすることができるようにする。その変容によって学級がどのように変容したか、自分のしたことが学級や学校に必要であったか考えられるようにする。

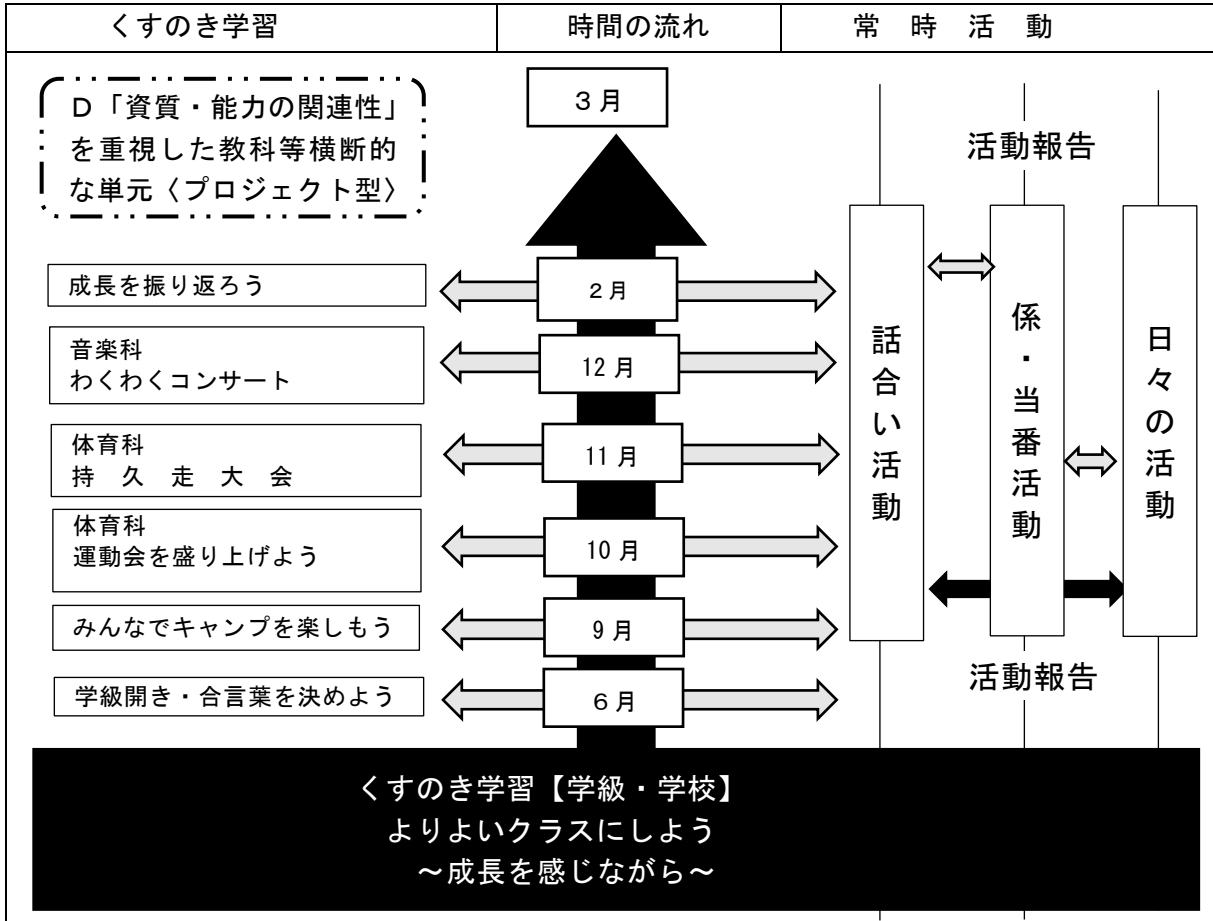
（森田 宏美）

3【実践事例】

第4学年

「よりよいクラスにしよう～成長を感じながら～」
くすのき学習【学級・学校】（+体育科・道徳科）

【単元全体構想図について】



子どもたちは、これまでの学年でそれぞれの学級の文化を形成してきた。そこで、進級当初に、子どもたちが今まで経験し、培ってきたことを出し合い、学級としての基盤となる事象を話し合いによって考えていった。新しい集団の中で、自分が培ってきた学級の様子を紹介し、よりよいものになるよう、折り合いを付けながら決定していくことを通して、子どもたちは、自分らしさを発揮しながら、自分たちの学級をつくり上げてきた。その中で、自分や集団の成長を意識せず、決まったことや言われたことをただ行っている子どももいる。そこで、「友達の役に立った」「友達が喜んでくれた」という経験を積み重ねていく必要があると考える。

本単元は、自分らしさを生かしながら学級づくりを行う単元である。さらに、人とつながりたい、認められたいという欲求を大切にしながら、単元を構想していくことで、個が高まり、やがて、集団の高まりも見えるのではないかと考える。学級という空間で活動を行う中で、子どもたちは問題にぶつかるたびに話し合いを行い、改善をしながらだんだんと学級を作っていく。このような活動を年間通して行うことで、子どもたちが目指す集団の完成を目的としている。日々の活動（朝の会、帰りの会、休み時間での活動）や、学校行事（運動会、校内キャンプ、わくわくコンサート）などを経験し、得てきたことがそのまま自分や学級の成長につながることを意識して行う。また、学級がうまく機能するためには、いろいろな約束事や目的が必要である。それを子どもたちの話し合いにより作成させることで、子どもたちはより自分事として意

識し、活動ができるのではないかと考える。また、時期ごとに振り返る時間を持つことで、時間軸を通して自己を客観視する力も育ってくると考える。その積み重ねが学級の成長につながっているということ子どもたちが実感し、より客観視することで、自分や自分たちの未来を考える力も育ってくるのではないかと考える。

学級という集団に所属することは、子どもたちにとって学校生活の中心であり、基盤であるため、すべての教科等の学習が必然的にかかわっている。そこで、それぞれの教科等との関連と、常時活動（朝の会、終わりの会、係、当番活動等）、特別に設定された活動（行事や児童会活動）との関連を意識して学習を行っていく。

【単元のねらい】

- 学級の諸問題を話し合っ解決することや他者と協働して取り組むことの大切さを理解し、合意形成の手順や活動の方法を身に付ける。
- 多様な意見を生かして合意形成を図り、協力して実践する。
- 他者と協働しながら日常生活の向上を図る。

【単元の実際】（時系列）

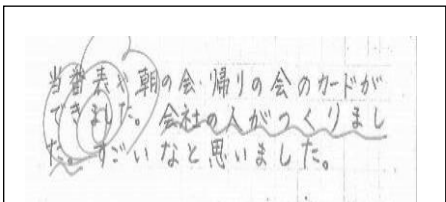
○ 学級開き（6月）※令和2年度はコロナのため、本来は4月のところ6月に実施した。

子どもの課題意識と主な学習活動	指導上の留意点（○）と評価（●）
<p>よりよいクラスにしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ それぞれが自分の思いを出し合い、話し合 う中で集団の現状を把握し、どのようなクラ スにしたいか決める。 ・ 学級にとって必要な当番活動や自分たちの 創意を生かした係活動について、話し合い、 当番活動の詳細と係のグループ決めをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 新しい学級の中で、これまでの経験を尊重 させるような話し合い活動をする。 ● 所属感や有用感を感じることができたか。 ○ 話し合いの場とタイミングを吟味し、より能 動的な話し合いとなるよう工夫する。 ● 自他の思いや願いを尊重しながら話し合 い、活動意欲が高まったか。

これまでの学級で集団を創造し、学んできた子どもたちにとって新しい学級には、どのような学級になるのか、学級に溶け込むことができるのかなどといった、期待と不安が常に交差している状態である。子どもたちが主体性を発揮し、今まで培ってきたそれぞれの学級を生かすことができるよう、まず、子どもたちが前年度までに経験してきた係や当番の方法、工夫された活動などを自由に発言させた。そのよさを互いに言い合ったり、質問に答えたりする中で、子どもたちは互いに交流し、学級としての初めての話し合い活動を行った。

○ 給食当番（6月）

給食当番を決めずにいると、子どもが、給食の時間の前に担任に問い掛けてきた。

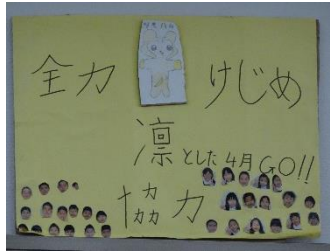
<p>C 「給食当番が決まっていません」「どうですか」 T 「どういう決め方がありますか」 C 「給食当番がいないと、給食が食べられない」「みんな で決めないといけないと思う」 T 「それなら、みんなで相談しないといけないね」 (今までの経験を振り返りながら、案を出し合い、く じ引きで決めようということに決定した。) T 「自分たちで給食当番が決められましたね」「他に要なことも考えていきたいね」 C 「やってみます」</p>	
--	--

資料1 子どもの日記

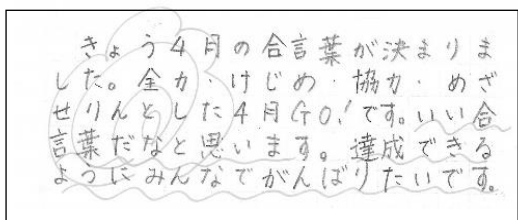
この後、子どもたちは、昼休みなどを利用して、当番表と当番の約束事を作成した。また、朝の会や帰りの会の司会進行表の必要性にも気づき、自分たちで作成した。自分たちで決めた約束事は、みんなで注意し合っ守ろうと努力している。経験が力として表れ、この経験が他の活動にも生かされていった（資料1）。

○ 学級の合言葉の設定（6月）

子どもたちから、学級全体の目標があればいいのではないかと、「学級の合言葉」に関する提案があった。そこで、学級の合言葉について話合いの場を持つことになった。

<p>C 「4年月組の学級の合言葉があれば、もっと仲のよいクラスになれると思います」</p> <p>C 「意見はありませんか」</p> <p>C 「笑顔が大切だ」「思いやりのあるクラスにしたい」 「先生はどのようなクラスになってほしいですか」</p> <p>T 「何でも全力でがんばるクラスになってほしいです」</p> <p>C 「3年生の時、凜とした附属っ子を目指そうという目標を持っていたから、『凜』を入れたいです」</p> <p style="text-align: center;">～</p> <p>C 「では、『全力 けじめ 協力 目指せ 凜とした四月（4年月組）』が合言葉でいいですか」</p>	
--	---

学級の合言葉に対して、何か共通の目標があった方がよいという思いは一緒であることが分かった。子どもたちの思いと教師の思いを合わせ、合意形成を図りながら、決定していった。子どもたちの日記からも自分たちでつくった目標に向かってよりよいクラスをつくっていきたいという思いを見取ることができる（資料2）。その後、学級歌（四月国歌）を作ったり、学級の約束事（四月憲法）を作ったりしながら、自分たちの学級を創り上げていった。

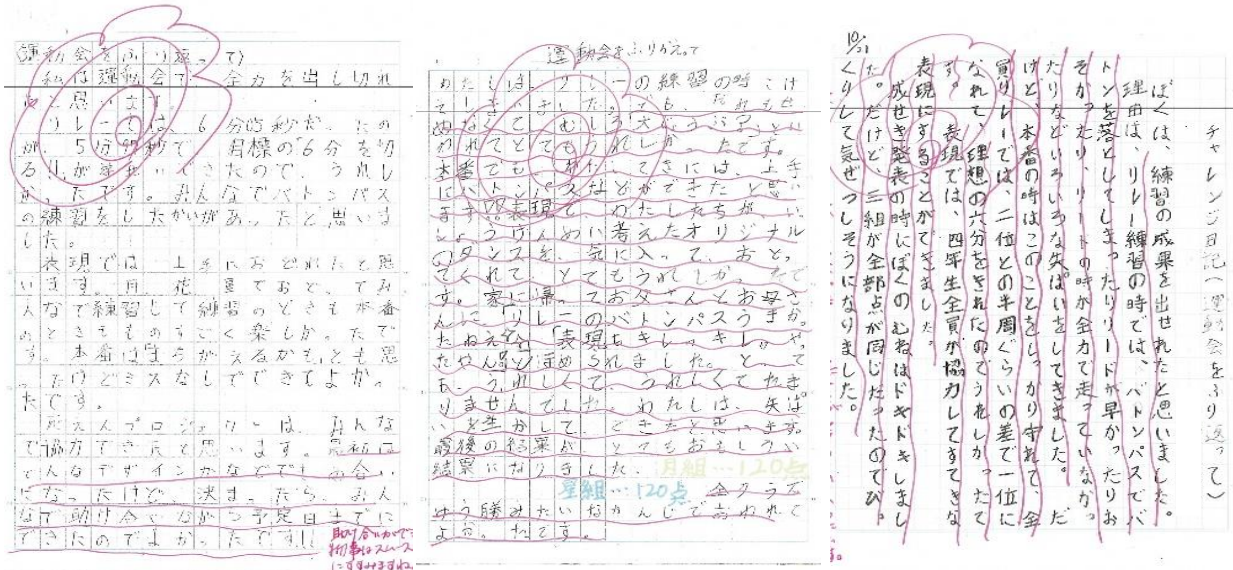


資料2 子どもの日記

○ 運動会を盛り上げよう（10月）

学級に参画しようとする子どもの育成に、学校行事はとても大きな役割を担っている。それをきちんと「プロジェクト型学習」として計画・実践することが、有効な手段であると考えられる。

単元名 「運動会を盛り上げよう」		
子どもの課題意識と主な発言・行動	他教科との関連	分析と評価
<p>運動会に向けての「目当て」を設定しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 今までの運動会はどうだった。 ○ 全力で取り組みたい。 <p>役割分担を決めよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ プロジェクトを立ち上げよう。 ○ 練習計画を立て、それに沿って活動しよう。 ○ 計画表を作りたいな。 ○ 計画通りにいかないな。 	<p>体育科</p> <ul style="list-style-type: none"> ・走る楽しさ、心地よさ ・友達と競走する楽しさ <p>図画工作科</p> <ul style="list-style-type: none"> ・使用する道具の選択 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「目当て」の設定には、今までの経験と、昔の映像などを見ることで、4年生なりの考えを持ち、話合いをした。「全力」「諦めない」「過去の自分に勝つ」に決定した。 ○ 子どもたちは限りある時間を有効に使い、自分が「すべきこと」に全力で取り組んだ。目的意識があるため、その話合いはスムーズにできた。時間があれば練習を行った。学級全員で心を一つにできるものとして、全員が取り組んでいった。
運 動 会		
<p>運動会を振り返ろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 1位がとれて、うれしいな。 ○ 努力は人を裏切らない。 ○ それぞれのプロジェクトの人が責任持って活動したからうまくいったのだと思うよ。 	<p>道徳科</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個性の伸長 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 練習は失敗を繰り返し、悔しい思いをしながら、それでも諦めず頑張ることができ、失敗をしても諦めず努力する姿を見取ることができた。振り返りの話合いで、子どもたちは、口々にお互いのよかったところを伝え始め、認め合った。



資料3 運動会後の子どもの日記

この活動を通して、子どもたちは仲間との活動に対して快のイメージを抱いていることが分かる（資料3）。また、自分の成長と仲間の成長をつなぎ、「クラスの成長」として認識している。自分を客観視する力と同時に、他者意識の広がりも感じ取ることができる。

○ 四月成長式をしよう（2月）

「四月成長式」とは、自分たちの成長を実感し、喜び合ったり、今までお世話になった人たちに感謝の気持ちを伝えたりすることを目的として行う式である。

単元名 四月成長式をしよう		
子どもの課題意識と主な発言・行動	他教科等との関連	分析と評価
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">四月成長式ですべきことを考えよう。</div> <ul style="list-style-type: none"> ○ 感謝の気持ちを伝えたい。 ○ 自分の成長を確かめたい。 ○ 自分の将来について考えたい。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">どのようなことをすると伝わるかな。</div> <ul style="list-style-type: none"> ○ 四月で学んだことを発表したい。 ○ 学級全体で演奏したいな。 ○ アルバムを作りたいな。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">役割分担をしよう。</div> <ul style="list-style-type: none"> ○ 演奏する曲を決めたいな。 ○ アルバムづくりについて考えたい。 <p>計画に沿って活動しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 責任持ってしないとイケないな。 ○ するべきことがある。協力が必要だ。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">道徳科</div> <ul style="list-style-type: none"> ・感謝 ・個性の伸長 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">音楽科</div> <ul style="list-style-type: none"> ・頭声発生 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">国語科</div> <ul style="list-style-type: none"> ・スピーチ <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">図画工作科</div> <ul style="list-style-type: none"> ・デザイン ・そうぞう力 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 名前を「四月成長式」と決め、何のためにするのかを「自分の過去、現在、未来について考える」「感謝の気持ちを伝える」という大きくまとめて二点に絞った。 ○ 何のためにするのかという目的意識を持っていたので、内容も目的に沿って決めることができた。 ○ 自分の役割を果たし、「四月成長式」を共に創り上げることを通して、仲間と活動することの楽しさや喜びを味わい、仲間と協力することの大切さを実感したり、集団での達成感を感じたりしていた。
四月成長式		
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">活動を振り返ろう。</div> <ul style="list-style-type: none"> ○ お家の人に喜んでもらえてよかった。 ○ 自分たちが成長したことを確信した。 ○ このまま成長を続けたい。 ○ 緊張したけど、うまくいった。 		<ul style="list-style-type: none"> ○ 活動を通して、たくさんの人とのかわりの中で育ち支えられていることに気づき、感謝する気持ちを持つとともに、かけがえのない自分の存在を実感することができた。

私は、昨日の4月成長式をしてよかったです。理由の一つは、みんなと協力できたことです。それに、私達のチームは、ワイズも出したから、新しい知識も増えたとし、相談などをしたりすること、友達とも、と仲をうかめることができました。理由の二つ目は、自分の知らない相手のいいところとか、たこと。私は、毎会たんとうだっただけで、本番前の練習で、自分達をアドバイザーでうしたときに、「～さんを見てから気をつけてね。」と立川さんがいてくれたとき、「立川さんってまじめがいいが、あつていいな」と初めて思いました。他にも「～な」と思。他人はたくさんいます。私は、4月成長式をやったことで、少し大人に近づいている気がしました。

達成感がありまして、とくに未来スピーチで一人で行ったのは、おわりのことばは、おすびでできていたけど、みんなもうして、よんでやっしてしまいました。社会では、多聞中々聞しかと聞か、たのでどうかな?と思。みんなもうたのたいけつたのです。ごくんしゅうしてよかった。おと思。今園の4月成長式でいろいろことがわかりました。

- ① れんしゅうをいっばいする。
- ② せんちゅうにまげない。
- ③ やりぬくか、全力でやねかとって、大切にとまげました。なぜか、1年がままでの、がよう余とちがう境がして、かんぼううと思。このあかげで未来と本場の成人式のためにかんぼううと思。よかったです。

私は、昨日の4月成長式をしてよかったです。理由の一つは、みんなと協力できたことです。それに、私達のチームは、ワイズも出したから、新しい知識も増えたとし、相談などをしたりすること、友達とも、と仲をうかめることができました。理由の二つ目は、自分の知らない相手のいいところとか、たこと。私は、毎会たんとうだっただけで、本番前の練習で、自分達をアドバイザーでうしたときに、「～さんを見てから気をつけてね。」と立川さんがいてくれたとき、「立川さんってまじめがいいが、あつていいな」と初めて思いました。他にも「～な」と思。他人はたくさんいます。私は、4月成長式をやったことで、少し大人に近づいている気がしました。

資料4 四月成長式直後の子どもの日記より

友達に対する感謝の気持ち、お世話になった方々に対する感謝の気持ちが表れている。また、自分たちのことを誇りに感じていることも分かる。子どもたちは、他者の思いや成長、努力を通して、客観的に自分が所属する集団の成長に気付き、この集団の中で、何かしたいという思い、すなわち「参画したい」という思いが芽生えていたことが分かる（資料4）。

【単元の成果と課題及び次年度に向けて】

- 「学級に参画しよう」と思う気持ちを持つためには、「出会い」の場面がとても重要である。今までの経験を生かしつつ、新しい環境に対応するためには、ある程度の自由が必要である。学級としての形だけにとらわれるのではなく、進んで学級のことを考え、自分の思いと他者の思いをつなげつつ、よりよいものを目指すことができる環境づくりが大切であると考える。
- 「役に立てるかもしれない」「できるかもしれない」という欲求が高まってくることが、「自分らしさ」を生かそうとすることにつながり、「学級に参画しよう」とする子どもの育成につながった。そのためにも、自己理解を深めたり、他者に認められたりする経験を多くさせる必要性が考えられる。
- 子どもたちはたくさんの活動を通して、振り返りを行い、自己評価、他者評価、そして学級評価を繰り返してきた。その繰り返しのよって他者意識の広がりが見え、よりよい学級にしようと、培ってきた力を使って、主体的に動く姿が見られた。
- 「自分らしさ」を持って、集団に参画しようとする、ぶつかることもある。また、活動に足りない部分や、誰もやりたくないと思うことも出てくる。そこで大切にしたいのは、思いやりであり他者への配慮である。それについては、まだまだ個人差があり、身に付いていない子どももいる。意図的に学級や個に応じた壁を乗り越える場を設定し、やり抜きたいという思いを持たせられるようにする必要がある。
- ☆ 自分らしさを発揮するためには、互いに補完し合う関係づくりが必要である。更なる補完し合う関係性の構築と、その中で、子どもたちが大きく活動できるような場の設定を工夫していきたい。

(森田 宏美)

4 研究のまとめ

(1) 子どもの学びをつなぐ指導の手立てについて

ア 「出会い」の場面（主に子どもと「学習材」をつなぐ手立て）

- 子どもの「解決したい」という気持ちを引き出す出会いの場を工夫することで、思いや願いを持って、主体的に「学習材」にかかわることができた。
- 特別活動における見方・考え方について解釈を深め、見方・考え方を生かす手立てを見いだしたことで、子どもが「学習材」を自分事として捉え、自治的、自発的にかかわることができるように働き掛けることができた
- 学習や日常生活の中で見方・考え方を生かしているのか、教師の意図的な働き掛けによるものなのか判断することが難しい。子どもが見方・考え方を生かしている具体的な姿をしっかりと見取り、考察していく必要がある。

イ 「追究」の場面（主に子どもと「他者」をつなぐ手立て）

- 対話を深めるために、グルーピングを工夫したり、ファシリテーション・ツールを用いたりすることで、自分の考えと友達の考えとの共通点や相違点を比較することができた。
- タブレット端末などを活用することで、子ども同士で考えを比べたり、それぞれなぜそう考えたのかを聞き合ったりして、自分の考えを深め、合意形成を図っていくことに有効であった。
- タブレットの有効性は感じたものの、ICT を活用した伝え合う活動については課題が残った。タブレット端末で子どもの活動を活発にしたり、子ども同士をつなぎ、話合いの質を高めたりしていくには、くすのき学習【学級・学校】における ICT 活用の研究を続けていく必要がある。

ウ 「振り返り」の場面（主に子どもと「自分自身」をつなぐ手立て）

- 「振り返り」の際に、何ができるようになったか（学習内容）だけではなく、どのように活動してきたか（学習方法）をしっかりと認識させたことで、学びを自覚することができるようになった。
- 「振り返り」の際に「学習材」「他者（学び方）」「自分自身（自分の成長）」の具体的な視点で振り返ることで、自分ができるようになったことや成長したことが明確になり、自分への自信につなげるとともに、これからも集団のために自分らしさを生かしていこうとする未来の自分自身にもつなげることができた。
- 活動の様子を撮影した写真やチェックリストを活用し、実践したことを振り返ることで、自分や集団の変容を感じることができたが、それを言語化する力には個人差がある。自分の思いを表現する力を身に付けられるよう振り返りの時間をどう位置付けていくのか、模索していく必要がある。

(2) 子どもと創る「深い学び」における評価について

- 全力ノートを中心に振り返ることで子どもが意欲的に振り返るとともに、教師は子どもの学びを全力ノートからも評価することができた。
- 子どもたちはたくさんの活動を通して、振り返りを行い、自己評価、他者評価、そして学級評価を繰り返してきた。その繰り返しによって他者意識の広がりが見え、よりよい学級にしようと、培ってきた力を使って、主体的に動く姿が見られた。
- チェックシートやワークシートによって、現在や将来にわたって自分らしく生きるために、目標を立てることができたが、自己のよさを生かそうとしているか「他者」と協働して目標の達成を目指しながら主体的に行動しようとしているかを見取ることがむずかしかった。子ども自身が自己の成長や変容を把握し、主体的な学びの実現や今後の生活の改善に生かすことができるようにするためには、教師自身の見取る力に依拠するところが大きい。今後もその手立てと研修を兼ねた評価として研究を進めていきたい。

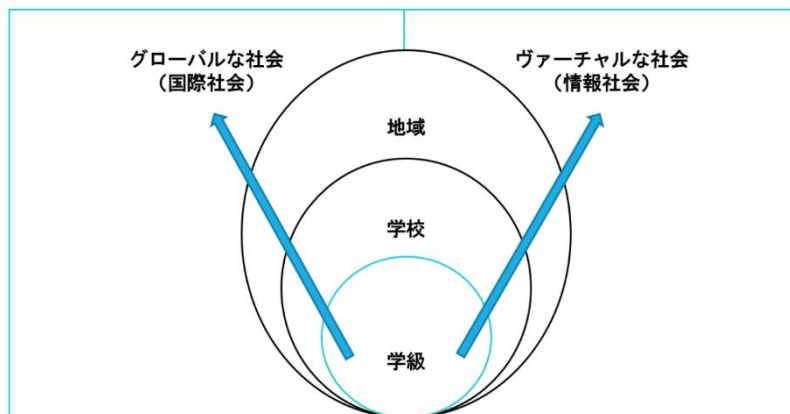
題材の内容や提示方法を子どもの意識に沿ったものにするすることで、子どもの「問題を解決したい」という思いが強くなり、子どもらが学習材とつながろうとする姿が見られた。しかし、教師の指導から学習の方向性や指導の意図が出過ぎてしまうと、子どもの主体性を減退させたり、学びの意欲を低下させたりしてしまうことがある。

「自分らしさを生かし、学級や学校に参画する」姿が表れた子どもは、他教科等の学習や実生活において、自信を持って取り組む姿が見られた。自信を持つことは、生きていく上でこれからの原動力となり、「自信らしく生きる」ための基礎となるものである。育まれた資質・能力は、大人になったとき、どのような課題に直面しても、他者とかがかりながら、最後まで諦めず、よりよい解決を目指していくことができるだろう。そして、子どもたちが、自分の力で、未来を切り拓いていくことを期待している。 (森田 宏美)

(2) 研究協力者から

特別活動は、児童の自発的、自治的活動を基に自主的、実践的に展開される。学級や学校生活の充実とともに、家庭や社会における個人の生活の向上が目指される。学級活動(1)、学校行事、児童会活動、クラブ活動は、集団を基盤にして、生活の向上と充実が図られる。学級活動(2)(3)は、個人を基盤として、生活の向上と充実が図られる。そのため、児童の実態に応じた活動を、学習材として提供することになる。

本実践では、「学習材」として二つの探究が行われた。第一は、議題や題材を基盤とする活動を学習材としてよりよくするアプローチである。第二は、活動内容や課題について、タブレット端末等を活用して、メタ認知学習材として、写真等の振り返り教材を作成するアプローチである。教科書のない特別活動について、定期的に学級や個人の生活の在り方を写真や動画にとり、それを基に振り返ることで、学級や個人の変容を把握することができる。



第一のアプローチは、特別活動の実践において多く探究されているため、本実践が力をいれたものが、第二のアプローチであり、積極的にICTを活用することにした。その背景には、特別活動の資質・能力育成の視点である「社会参画」「人間関係形成」「自己実現」は左図

のように、子どもの巣立つ社会を想定して捉えなおす必要があるためである。

これまでの特別活動研究はどちらかというと、学級や学校に閉ざされた社会参画、人間関係形成、自己実現を想定している。しかしながら、現在では、グローバルかつヴァーチャルな世界に通用する資質能力を想定することが求められている。そこで、ICTを活用することで、学習材、他者、自分自身とつなぎ、深い学びの実現を探究している。この内容は授業者の報告に詳しいところであるが、もう一つのメタ認知による深い学びの実現に向けて、Zoomを活用した学級交流プロジェクトを実施している。12月17日(金曜日)3時間目、「広げよう、つなげよう、高めよう係活動」という異学年交流会を、琉球大学教育学部附属小学校5年3組、北見市立三輪小学校4年2組とともに実施した。このプロジェクトは、ネット空間における人間関係形成能力やコミュニケーション能力、社会参画能力の育成を目指して実施している。現段階では、試行的な実践ではあるが、21世紀の新たな特別活動の展開を目指し、研究を進めているところである。学習材と他者・自己をつなぎながら、変化の激しい社会で求められる資質能力の育成に取り組む実践として、重要な価値が示されているといえよう。 (白松 賢)

